兵庫教育大学　大学院連合学校教育学研究科
教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座
D21601K　　宣　昌 大

博士論文要旨

研究題目

造形活動における感受・知識・他者が学習者に影響を及ぼす際の身体への意識変容についての研究

＜本論文の構成＞

序章 研究の動機と概要
第１節 研究の動機と課題への意識／第２節 本論におけるリサーチクエスチョン
第３節 本研究の構成
第１章 身体で感受する指導の実態
第１節 学校教育と体性感覚、触覚／第２節 感覚と身体／第３節 諸感覚
第４節 クロスモーダル知覚と共感覚
第５節 まとめ 身体感覚で美術教育活動を捉えるために
第２章 感覚が学習へおよぼす影響
第１節 触覚とオノマトペ／第２節 本調査における学術背景
第３節 中学校学習指導要領における美術科での感覚の取り扱い／第４節 本調査の概要
第５節 調査の対象とする授業題材の検討／第６節 授業の実施と作品からの検討
第７節 中学生のアンケートによる触ることへの意識の変化の検討／第８節 本章のまとめ
第９章 調査の総合考察と今後の課題
第３章 感覚と知識が表現へおよぼす影響
　第１節 調査での目的と背景／第２節 調査の概要／第３節 調査での仮説
第４節 本調査での集計結果と分析／第５節 本調査での考察
第６節 調査の総合考察と今後の課題
第４章 他者の見方が表現へおよぼす影響
第１節 はじめに／第２節 調査の概要／第３節 仮説／第４節 調査結果と分析
第５節 生徒の観察傾向の視座の推移／第６節 考察
第７節 調査の総合考察と今後の課題
第５章 外界の価値の感受による自己の価値との出会いの過程の検討

第１節 調査の目的と背景／第２節 調査の概要／第３節 調査結果と分析
第４節 考察／第５節 調査の総合考察と今後の課題
終章 結論
第１節 本論の成果に基づく新たな感受と行為のサイクルモデルの提案
第２節 本論の成果による展望

＜本論文の概要＞

現在の美術教育研究では，合理的な学習方法に基づく実践によるものが散見されている。しかし，誰にとっても同じ答えを生み出すのではなく，自分自身と社会とを結びつけるために，自分なりの答えを創造する学びが，未来を幸福に生きていくために必要であると考える。その創造活動の起点として，筆者は自己の内面と社会とをつなぐ重要な存在である身体感覚に注目した。しかし，造形活動における身体感覚についての研究は非常に少なく，身体感覚が新しい価値創造に与える影響は明確になっていない現状がある。そこで，①感覚と表現との関係，②知識の影響，③他者の見方からの影響という３つのアプローチから，身体感覚と個人にとっての新しい価値創造との関わりを明確化する論考を行った。

第１章では主に，感覚と記憶についての先行研究から，美術教育と身体感覚の関わりについて考察した。まず，新たな価値を生み出すことは，中動的な感受を意識することが重要であることを示した。しかし，これまで美術教育学で検討してきた身体感覚は漠然としたものであり，身体の多感覚間の相互作用を扱う論考が多くないことを指摘した。さらに，身体知に関する論考から，身体運動および行為は，周囲の環境と自身の身体との関係の中で判断し行っていると考えられることを論じた。また，先行研究より，オノマトペによる名称の音韻と，それが表す感覚イメージとの間による体系的な結びつきから，対象を言語化しにくくてもオノマトペであれば，その音から質感を他者と共有しやすい点についても整理した。

第２章では，触覚を働かせて対象と関わった時に生じる生徒の表現の変容を調査分析し，感覚が表現に与える影響について考察した。オノマトペの文字デザインを行う授業の中で，触覚を意識的に働かせる場面を取り入れ，感覚体験が表現に与えた影響を分析した。その結果，①触覚への意識が高いほど，他者に意図が伝えやすい視覚的な作品を制作しやすくなる傾向がある。②触覚と記憶や概念との関係が高くなると，独自性が高まり，他者に意図が伝えにくくなる傾向がある。③触感と，その音声的表現である擬態語を，造形要素に置き換えることによって，生徒の触覚へのイメージが鮮明化される傾向があることを明らかにした。

第３章では，自身の感受が，知識や情報によって記憶や経験と結びつく際の変容について調査した。感受は，個人と外界との相互作用に留まらず，想起された経験などが影響することが想定される。そのため，鑑賞対象となる作品に関する知識の有無によって，鑑賞者の見る行為や触る行為，あるいは発話等を含む鑑賞態度がいかに変容するか分析した。そして，作者を知らずに鑑賞した場合と，作者に関する知識を知って鑑賞した場合との，対象との関わり方を生徒の姿から考察した。その結果，学習者にとっての新たな知識が感受しようとす

る身体の行為に影響することが明らかになった。

第 4 章では，班活動等での相互学習を記録し，観察の視座の変化について分析することで，他者が感受に与える影響について考察した。授業では，触覚，嗅覚，聴覚を対象として，特定の感覚を意識した活動を行った。その結果，相互学習で特定の感覚を意識した活動から，感覚で捉えた事象を相互に交流し合うと，個人の観察態度が変容し，それに伴い，相互の視座で影響を受け合う可能性があることが明らかになった。そして，自身の身体感覚を働かせるためには，個人で対象と関わるだけでなく，他者を自分と異なる身体感覚を持つ存在として認識し，交流することが重要であると示唆された。

第 5 章では，中学校美術科での授業における感受と造形表現行為，および主題生成の関係について生徒の姿を多角的に分析した。そして，これまでの各章で得られた知見を活用しながら，生徒の記述を基にした量的な分析や，生徒が実際に感受している様子を映像から質的な分析を行うことで，生徒の様子を精緻に見取った。その結果，感受から主題生成した生徒は，感覚的に作品制作に向かう傾向が明らかになり，自分とは異なる存在を認め，その他者を分かろうとすることで，自分自身の感覚や興味に気付くことができる可能性が示唆された。

終章では，自己の内面と外界をつなぐ身体について，感受と行為のサイクルモデルを用い，改めて第 2 章から第 5 章までを概観し，以下の 3 点から総括的に考察し，結論とした。

① 触ったことをオノマトペや音声言語に置き換えることでイメージが鮮明化すると、触った感じを他者に伝えやすくなり、また、独自性の深まりがみられた。また、触ることで外界を整理、抽象化するなど、自分なりの価値を見出しやすくなる傾向が確認された。
② 他者によってもたらされる新たな知識が、それ以前の自己の知識や記憶に依る見立てをはじめとした主に視覚的情報での感受から、他者へ思いを馳せるよう触覚をはじめとした多感覚での感受へと変化し、それに伴った自己の内面の変容が確認された。
③ 互いに異なる視座である他者の存在が、共に感覚を通した観察を行うことで、相手の視座を自分に取り入れる傾向が確認された。

以上のことから，知識や記憶，他者の影響を受けることで，造形活動における身体への意識変容は，合理的な学習では得られにくい，個人にとっての新しい価値に向かう創造的な営みであるという結論に至った。これまでの先行研究では，表現活動や鑑賞活動での，個人の感覚の一部に限定した身体の働きによる感受や知識，記憶の影響による意識の変容についてのみ議論がなされてきた。しかし，本研究では，他者の存在による感受への影響と，その影響が能動的な関わりだけでなく，中動的な関わりによって変容することについて述べたことが本研究の新規性であり成果であると考える。